

くどくて気持ちが伝わらない

三月二十五日 水曜日 くどくて気持ちが伝わらない

今日は、ハンドボールの練習は休み。

充分、睡眠を取る。
筋肉痛はそれほどでもない。

十時頃起床である。

何もする気がない。
勉強も、ちと、後回し。
何かないかと考える。

「いる本、全部取っつけ。

後は、いらんもん全部売っちゃうから。」
と兄貴が言っていたのを思い出した。

それで、今日、兄貴の部屋を荒しましょうとて、
京太と幹夫をつれて、
兄貴の部屋の本箱、本棚の本をあさる。

部屋中、本だらけで、足の踏み場もない。
大変、たくさんある。
京太も僕も顔を隠れるぐらい本を持って出る。

僕が取る本も、かなり多くて、
「こんなに取ってもいいもんかな。」と不安だった。
「まあ、いい、いるなら、後で返しゃいいんだ。」と、
遠慮なく、隣の自分の部屋へ投げ込む。